

国語

(六〇分)

第1問

次の文章を読んで、後の問い(問1～8)に答えよ。

解答番号は

1

15。

(配点50点)

アメリカのオン・キョウ技師チャールズ・ダグラスは、一九五〇年代に「ラフ・ボックス (the luff box)」という装置を開発した。これは、いくつかの異なる笑い声と拍手がボタン一つで再生されるシステムである。テレビ放送が開始されて間もないころ、ラジオがそうであったように、スタジオに観客を入れた状態でドラマやバラエティを製作することで、ライヴの臨場感を生み出そうとした。しかし、実際の観客というのは、しかるべき笑いのタイミングを外してしまったり、笑い声が過度に長続きしてしまったりなどして、体裁の整った番組作りには不向きなところがあった。(Ⅰ)そこでダグラスは、すでに録音ずみの笑い声や拍手の音をちょうど良いときに映像に追加するというアイデアを思いついた。「笑いの缶詰 (canned laughter)」や「偽の笑い」と呼ばれる、^ア録音された笑い声を挿入する技術の誕生である。

今日の日本のテレビ番組でも、こうした効果音が多用されているのは周知のとおりである。また近年では「ワイブ」と称される小さい画面もよく活用されている。メイン画面の片隅に挿入された小さい画面の中では、スタジオの芸人やタレントたちが映っており、彼らはメインの画面で展開されている出来事を見ている。彼らはしばしばやや大げさな表情や身振りでリアクションを行い、メインの画面で起きていることを説明したり解釈したりする。「笑いの缶詰」も「ワイブ」も、視聴者に調子の良いリアクションとはどのような

なものをかを指示してくれる。それらの声や表情は「ここで笑うんですよ」「これは驚くんですよ」などと言ってくれているようなものである。(Ⅱ)ダグラスが考えたように、実際の観客は笑いのタイミングがわかっていないことがある。映像に、笑い声という合図が付加されることで、視聴者は容易に笑うべきタイミングを知り、それに合わせて笑うことで、間違いなく笑うことができる。

こうした技術は、この笑いのツボはどこにあるのか、この笑いにはなによえに面白いのかをとりあえず私たちが考えずにすむようにしてくれるという効果をともなっている。笑い声と一緒に笑っていれば、そこで起きているおかしいことに、とりあえず参加できるというわけである。この技術は、素材の映像をさらに一層面白くするものであり、それは映像をさらに「気持ち良くする (weechnig)」ものである。この気持ち良さには、笑いのツボを教えることで私たちがそれ以上考えなくて良いようにする、という意味合いも含まれているのだろう。

哲学者のスラヴォイ・ジジエクは「笑いの缶詰」のこうした側面を非常に興味深いと言う。「というのも、笑いは義務であって自発的な感情ではないという逆説を含んでいるからだ」。笑いは、おかしいから^お自ずと生まれる自発的なもののようにでいて、実のところ、どこがおかしいかを(はつきりと言葉で明示するかは別としても)

A

ものでもある。(Ⅲ)先に述べたように、

笑いにはレヴェルがある。おかしさは私たちに、そのおかしみがわかるかと問うてくる。(Ⅲ)おかしみに触れた私たちにはこれに答える義務が生じる。

「笑いの缶詰」は、そのプレッシャーを軽減してくれるというわけである。

そう言えば子供のころ、^a怪訝な表情を浮かべた父親から「お前はこのギヤグの意味をわかって笑っているのか?」と聞かれたのを覚えている。

※²『THE MANZAI』が大人気だった一九八〇年代のはじめ、多分、※³ ツービートの毒舌の漫才が何かを家族で見ているときだった。子供の知らない人名が列挙されたり、ギャグに独特の角度がついていたり、その上早口でまくしたてもする。※⁴ ビートたけしのおかしさは、小学生の筆者にわかるはずがなかった。(Ⅳ) それでも子供なりにツーツービートの面白さがわかっていづもりでいた。けれども真相は、芸人が変なことを言い、客席から笑いが起こるという一連のリズムにつられて、爆笑していただけなのだ。自分が父親になってそのことが良くなる。筆者の息子(小学四年生)は、何がおかしいのかわからないのは明らかなのに、でも、実にタイミングよく、テレビの中の芸人に爆笑し続けている。それを見て、やはりイそうだったのか、とB しまう。

ところでジジエは、「笑いの缶詰」にも一つ一つの解釈を与えている。「たぶん唯一の正しい答えはこうだ——テレビ受像機の中に具現化された「他者」がわれわれの代わりに笑ってくれ、われわれを笑いの義務から解放してくれているのだ。だから、たとえ朝から晩まで下らない仕事をし、疲れ果てて帰宅して、深夜までぼけっとテレビを見ていたとしても、後になってこう言うことができるのだ——客観的にみれば、C、本当に楽しい時を過ごすことができた、と」。私たちが欲しているのは、おかしくて笑うこと以上に、笑えるという気分であり、痛快なリズムが続いている楽しい雰囲気なのかもしれない。「笑いの缶詰」は、私たちに笑いの勘所を教えてくれるだけではなく、私たちの代わりに笑うという仕事もしてくれるのである。一人暮らしで暗い部屋に帰って来ると、真っ先にテレビをつける。テレビのバラエティ番組は賑やかで、それだけで部屋の中が楽しい気分になり、心がほつ

としてくる。バラエティ番組とは、そうした私たちの楽しさのために存在しているのではない。

ネタ番組で見せる優れた技量を持て余しながら、芸人たちが条件反射的にその場にちょうど良いふざけたことを口にする、周りのタレントがb 機転をきかせて、しかし可もなく不可もない合の手を入れる(もちろんそれが「笑いの缶詰」などの技術的演出の場合もある)。※⁵ 「天井」や「フリオチ」や「伏線回収」といった技術が形骸化し、それらをそつなくc スイコウすることが良きこととされる。芸人たちがタレントたちが、面白おかしく話を

出すという業務を生真面目にこなす「バラエティ系会社のサラリーマン」のように見えてくる。そうした約束事だけで作られたおかしさは、さしておかしくはない。けれども、調子の良い雰囲気と笑える気分を視聴者に振りまくという目的は十分に果たしている。

視聴者は、こうした雰囲気と気分を欲してテレビをつけるのだろう。これの気持ち良さに慣れてしまえば、難解なおかしさなんてなんら魅力的ではなくなるだろう。つまり、「楽しいこと」と「おかしいこと」とはいつも共存しているわけではない。「楽しいこと」を欲している者にとって、「おかしいこと」が余計に思われることもある。(Ⅴ) ここにあるべき「楽しい」雰囲気c がテレビの「掟」となって、テレビの作り手や視聴者を支配する。仮にそれが別の視点からは空疎な(おかしくない)ものに見えたとしても、私たちは生真面目に、この「掟」の履行に囚われるのである。

大学で笑いに関する授業をしていると、D こそが笑いにとって重要と考えている学生たちがケツ³コウ多いことに気がつく。リズムカルで調子の良い「楽しい」やりとりこそが理想的なのであって、それを阻害するもの

は（仮におかしさであっても）悪であるという意識は、若者のみならず日本社会に広く蔓延^{まんえん}している。意味不明なノイズは忌み嫌われ、波風の立たないスムーズな状態こそが望ましいとされる。技巧的な不一致は想定される範囲内であれば歓迎されるが、それ以上の尖^{とが}ったおかしさは求めない。こうした価値観は、テレビ番組だけではなく、ユーチューバーの動画を見ていると感じられるところである。

ともかくも私たちは、笑える気分に感染し、それに満たされたいと欲しているのである。

木村寛『笑いの哲学』

（講談社 二〇二〇年七月）より

出題の都合上、一部改変した箇所がある。

※1 先に述べたように「筆者はこれより前の部分で、芸人が取り上げた言葉の意味がわかる」「知識のレヴエル」と芸人が発揮した機知の才がわかる「想像力のレヴエル」に分け、笑いにはレヴエルがあることを論じている。

※2 『THE MANZAI』＝漫才のコンテスト番組。

※3 ツービート＝漫才コンビの名。

※4 ビートたけし＝漫才師の名。「ツービート」の一人。

※5 「天井」や「フリオチ」や「伏線回収」＝いずれも話芸の技術。

問1 次の1～3の傍線部のカタカナを漢字に直したとき、それと同じ漢字を含むものを、次の中からそれぞれ選べ。 解答番号は、

1 オンキョウ

1

① 王にキョウジュンの意を示す。

② キキョウなるまいにあきれ果てる。

③ 方言を聞いてキョウシユウにかられる。

④ デビュー作が大きなハンキョウを呼ぶ。

⑤ キョウチュウの思いを吐き出す。

2 スイコウ

2

① 犯行はミスイに終わった。

② 国力のスイタイを押しとどめる。

③ 美の世界にトウスイする。

④ ゲンスイが軍を統率する。

⑤ アパートでジスイ生活を送る。

3 ケッコウ

3

① 水が道のソッコウを流れる。

② 事実とキョコウとを区別する。

③ 新党のコウリヨウを定める。

④ 人心がコウハイの一端をたどる。

⑤ ゴルフ雑誌を定期コウドクする。

問2 傍線部 a「怪訝な」、b「機転をきかせて」、c「掟」の本文中での意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選べ。

解答番号は、
4
5
6。

a 怪訝な

4

- ① 怒鳴りだしそうな
② からかうような
③ 納得できないような
④ 笑いだしそうな
⑤ 見透かしたような

b 機転をきかせて

5

- ① 周囲に丁寧に対応して
② すばやく適切に対応して
③ うまく周囲に取り入って
④ この先の展開を予想して
⑤ 積極的に会話を主導して

c 掟

6

- ① 厳罰を伴う法律のようなもの
② 古くから続く習わしのようなもの
③ 形骸化したルールのようなもの
④ いざというときの心掛けのようなもの
⑤ 集団内で定められた約束のようなもの

問3 空欄 A、D を補うのに最も適切なものを、次の中からそれぞれ選べ。

解答番号は、
7
10。

A

7

- ① 正確に理解しなくても笑える
② 考えてばかりいたら笑えない
③ 知らないからこそ笑える
④ 的確に把握しなければ笑えない
⑤ 教えられてはじめて笑える

B

8

- ① 膝を打って
② 腹に納めて
③ 眉を寄せて
④ 目を閉じて
⑤ 鼻につい

C

9

- ① 自己に執着して
② 自己を空しくして
③ 自他の境を越えて
④ 他者を媒介として
⑤ 他者を犠牲にして

D

10

- ① テクニック
② わかりやすさ
③ 効率性
④ さりげなさ
⑤ 独自性

問4 本文からは次の一文が抜き出されているが、本文中の(Ⅰ)～(Ⅴ)のどこに入るか。最も適切なものを、後の中から選べ。

解答番号は、11。

例えば、適度な調子の良さを許可するテレビの中では、奇をてらった、エキセントリックなおかしさは雰囲気や乱す危険な存在に映る。

- (Ⅰ) (Ⅱ) (Ⅲ) (Ⅳ) (Ⅴ)

問5 傍線部^ア録音された笑い声を挿入する技術 について、筆者はどのよう^イに考えているか。その説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、12。

- ① 笑いのタイミングを提示し、私たちに楽しい雰囲気を与えてくれるが、笑いを義務にしてしまう側面をもつものである。
- ② 笑いの合図を出すことで私たちから笑いに対する主体性を奪い、本当の意味での笑いが育つことを妨げるものである。
- ③ 笑いに対する義務感から解放し、笑いのハードルを下げることで、気楽に笑える楽しい気分を提供してくれるものである。
- ④ 笑いのポイントを示し、この笑いはなにゆえに面白いのかを考えさせるといふ点で、笑いを理解する手がかりとなるものである。
- ⑤ 笑いの難易度を下げることによって私たちに何が面白いのかを理解させ、自発的な感情としての笑いを生み出させるものである。

問6 傍線部^イ「そうだったのか」とあるが、筆者は「そうだった」にどのような内容を含ませているか。次のa～eの中から適切なものを全て選んだ場合の組み合わせとして最も適切なものを、後の中から選べ。

解答番号は、13。

- a 当時の筆者は、笑いがわかると周囲に見せかけていただけだった。
- b 当時の筆者は、プレッシャーに押されて笑っているだけだった。
- c 当時の筆者は、調子のよい雰囲気や気分を享受しているだけだった。
- d 当時の筆者は、おかしさを理解して笑っているのではなかった。
- e 当時の筆者は、レヴェルの低い笑いを求めているだけだった。

- | | | | |
|-------|-----|-------|-----|
| ④ | ① | ② | ③ |
| a・c | a・c | b・e | c・d |
| b・c・d | | a・b・e | |

問7 傍線部^ア芸人たちが、面白おかしく話を回すという業務を生真面目にこなす「バラエティ系会社のサラリーマン」のように見える とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、

14。

- ① 本来は優れた技量を持つ芸人やタレントがその能力を発揮せず、与えられた仕事を消化するだけの表面的なやり取りに甘んじているから。
- ② 本来は一心に芸道や演技などに取り組むべき芸人やタレントが、金銭的報酬を得るためにバラエティ番組の雰囲気におもねっているから。
- ③ 本来は生の舞台でパフォーマンスを見せるべき芸人やタレントが、テレビ番組に出演したうえ、テレビ特有の約束事に縛られているから。
- ④ 本来は楽しく調子の良い雰囲気を作り出すはずの芸人やタレントが、周囲の雰囲気に取り込まれて、楽しい雰囲気を台無しにしているから。
- ⑤ 本来のバラエティ番組の平凡な展開を打破する役割を果たすべき芸人やタレントが、型通りのパフォーマンスを見せるだけに終わっているから。

問8

本文の内容に最も合致するものを、次の中から選べ。

解答番号は、

15。

- ① スタジオに観客を入れるという番組制作の手法は、観客に笑いのタイミングを指示しなければならないという煩雑さから下火になった。
- ② 若者は笑いの義務から解放されたがる傾向が殊に強いいため、最近では難解で巧みなおかしさよりも楽しい雰囲気が重視されるようになっていく。
- ③ テレビの視聴者は、作り手が提供する楽しい雰囲気を受け入れざるを得ないため、それを打ち破る笑いを求める声もある程度存在する。
- ④ 私たちは楽しい雰囲気を壊さない範囲での尖ったおかしさには寛容でいられるが、その雰囲気を損なうようなおかしさには不寛容である。
- ⑤ 笑いは、どこがおかしいかを理解して笑うという自発的なものではなく、ここで笑えという指示を受けたために生じる受動的な反応である。

第2問

次の文章を読んで、後の問い(問1～8)に答えよ。

解答番号は

16

30。

(配点50点)

人は幼い頃から、例えば近所の人からもらったリンゴがこんなにでっかかったと、両手を丸い形にして大きさを示したり、野球のボールと比べたりして、聞いている私たちに想像させようとする。ある物の大きさ(サイズ)長さと体積を表現するのに、手で形を作ったり、比較できる物を喩えに使用したりするのである。自分の体や身近な物を使ってこれくらいと表現すればわかりやすいためだ。自分が指し示したい物を表わすために、誰にもわかるシ¹ヒョウを使う。人類が物体を測る(計る、量る)ようになった最初は、きっとこのようなものだったのではないか。

農業を開始して定住生活を行い、余剰の物質の物々交換を行うようになったとき、交換する物質の価値を比較するために、互いに共通した尺度で客観的に物の大きさや重さや分量を測るようになった。その尺度が「物」を「測る」基準、つまり「モノサシ」である。例えば長さを表す単位として、最初は大人の体が使われた。親指の太さの幅がインチ(日本では「寸」、つまり先からかかとまでの足の長さがフット(複数がフィート)、肘から中指の先までの長さがキュービット(肘)という意味、胴回りの長さがヤード(小枝)という意味)という具合である。かつて「モノサシ」の漢字として「物尺」が使われていたのは、四本の指を伸ばし親指を横に広げた手の形の象形文字が「尺」であるためらしい。

しかし、同じ大人でも手足の大きさや背の高さが違うから、客観的な単位と言えないことは明らかである。紀元前三世紀頃に中国を統一して万里の長

城を作った秦の始皇帝は、何事も統一することが好きだったようで、貨幣や道路幅や書体などとともに、誰にも共通する単位の統一化を図った。彼は、黒黍の粒のある個数一列に並べて長さの単位として「度」、その長さを基準にして寸法を決めた箱(枡)で体積の単位を決めて「量」、その分量を重さの単位として「衡」というふうに度量衡の単位を定めたのである。こうして、自然物の黒黍を使い、大きさが揃った粒を選んで並べて長さの単位を決めると、客観性が高くなり、信用度が上がるというわけだ。

物の大きさを測るとは、実際の長さが基準単位の何倍であるかを数えることである。X、黒黍の粒一〇〇個を一列に並べ、その長さのヒモを作るという工夫がなされた。ヒモにすると、いくつも作れるので誰もが共通して持つことができるし、何本もつなぐと何倍も大きい物の大きさが測れ、何分の一かに切れば小さい物も測れることになる。こうして物の長さを測る道具としての「物差し」が発明されたのである。

国家が統一されると地域ごとに度量衡が異なっていたは不便だし、ヒモのようなものでは伸縮しやすいので誤差化しやすいという欠点があった。そこで、十四世紀頃になって、国王が命令して長さの基準の物差しとして伸縮しない金属を使い、それに合わせて体積や質量の基準となる枡や分銅も金属製にして全国に配布することにした。

A

のである。

おもしろいのは、円筒形の容器一つで、度Ⅱ長さ(深さや直径)、量Ⅱ体積(内部体積、内容積)、衡Ⅱ質量(そこに満たした水の量)の、それぞれの基準に使えるようにしたことだ。さらにいくつもの大小の円筒形の容器を組み合わせると、さまざまな度量衡の基準を定めることができるようになった。また、各円筒の内容積が順に石・斗・升・合と呼ぶ体積の単位を表わす

ようにした。石は一人の人間が一年に食べる米の量、斗は石の十分の一、升は斗の十分の一、合は升の十分の一である。昔は俵に米を入れて運んだが、俵には四斗(60kg)の米が入っていた。これらは私が子どもの頃に使っていた米の量を測る単位で、何か懐かしい感じがする。

一七八九年のフランス革命は、**B**による恣意的な単位を否定し、客観的に測れる物質を基準にして度量衡の単位を定める契機となった。メートル法の誕生である。長さの単位の1mは地球のシ^aゴ線一周の長さの四万分の一で、質量の単位の1kgは一辺の長さが10cmの立方体の容器に入れた摂氏四度の純水の質量と定義することになった。客観自然の物体を単位の基準としたのである。伸縮や錆がしにくい白金・イリジウム合金製の「国際メートル原器の棒」と「国際キログラム原器の分銅」が製作され、そのコピーが世界に配布された(一八七九年世界度量衡会議)。これによって、地球全体に共通する客観的な長さ^aと質量の単位が決まったのである。

ここまででは度量衡と呼んできたが、量(体積)は度(長さ)の三乗のことだから、長さの基準を定めれば**C**に決まる。その代わりに入って来るのが、物質の運動の記述に欠かせない時間である。動くとは時間とともに位置(基準点からの距離^b≡長さ)が変化する^bことから、変化を記述するための時間を考慮しなければならない。時間の単位の決め方は、決まった長さの振りの振動周期とか、地球の自転周期とか、水晶の振動周期というように、より規則的な周期運動が選ばれ、それに応じた国際時間原器が採用されてきた。そして、最終的には一九六七～六八年の国際度量衡会議で、セシウム原子が放つ光の周波数を測ることで時間の単位を定めるようにした。光は振動しながら伝わる波(電磁波と言う)で、周波数(≡振動数)とは一秒あ

たりに波が振動する回数だから、何回振動したかを数えると、その間に経過した時間を測ることができる。その振動回数を数える機械が原子時計で、およそ百万年に一秒しか狂わない時計として、時間の単位を定める原器となっている。

このように、物体の運動を記述する基本単位である長さ・質量・時間の基準(基本単位)を決めると、物質(正確にはマクロな物質)の力学運動を過不足なく記述できる。力学に登場するどのような物理量もこの三つの基本単位に分解できるからだ。**Y**、面積や体積は長さから、密度は質量と長さから、速度は長さ^aと時間から、というふうに、三つの基本単位の組み合わせから作られる単位が定義できる。それを組立単位と言う。それ以外に、熱や温度に関わる現象(熱力学)、電気や磁気に関わる現象(電磁気学)、原子の世界に関わる現象(原子物理学)、光度に関わる現象(光学)、の四つは右の三つの基本単位では表すことができず、別の四つの基本単位が存在するが、ここでは省略する。

三つの基本単位に対して、長さは^a国際メートル原器(それに刻まれた二本の線の間隔)が、質量は^u国際キログラム原器(それ自身の質量)が、そして時間は原子時計(セシウム原子から放出される電磁波の振動数の数)が、それぞれの単位のモノサシとなった。原器の品質の劣化や周囲の温度・湿度などによる微妙な変化も生じるから、誤差が生じることは避けられない。そこで、より誤差の少ない方法へと変えていくのが現在の計量学の課題となっているのである。

自然界には、基本定数と呼ばれる永久不変と考えられる物理量が存在する。例えば、真空中を伝わる光の速さは、秒速299,792,482mと

定められていて、これを基本定数と呼んでいるが、実際に測定して光速を決めているから必ず誤差が付随する。一方、原器に入れた二本の線の間隔で単位の長さを決めていたのだが、その線の太さをいかに細くしても有限の太さだから誤差が出てしまうし、原器の伸縮もある。この誤差が、「長さ」光の速さ×原子時計で決めた時間」として定めた単位の長さの誤差より大きくなってしまったのだ。そこで、一九六〇年の国際度量衡会議で、正式に国際メートル原器を廃止して、光速と原子時計を組み合わせて得られる紙の上の式を長さの単位とすることになった。原器を使わず、基本定数の組み合わせから長さの基本単位を決めたのである。

もう一つの質量には長い間国際キログラム原器をモノサシとして使っており、同じように基本定数を使って、原器より誤差が少ない質量の決定法はないものか、と検討されてきた。そこで提案された方法は、相対性理論と量子論という最先端の物理学を応用するもので、以下のように少々難しい説明が必要になる。

相対性理論では、 $E \parallel mc^2$ (c は光速の二乗) という式で表されるように、質量 m とエネルギー E は等価であることはご存知だろう。原爆や原発で、ウランなどの核物質の質量がエネルギーに転化する原理である。一方、光は量子論の立場で見ると、粒々の粒子の集団であり、そのエネルギーは $E \parallel hv$ で表される。 h はプランク定数と呼ばれる基本定数で、 v は光の振動数である。この二つの式を組み合わせると、 $E \parallel mc^2 \parallel hv$ だから、質量は $m \parallel hv/c^2$ と求められる。原子から放出される特定の光の振動数 v を指定すると、プランク定数 h と光速 c の基本定数で表される。これらの誤差が原器の誤差以下にできるなら、この式を使って質量の基準を決める方がよいことになる。何しろ、

原器では指紋一個分の質量の変化が誤差に入ってしまうくらいの高精度だから、それ以下にすることは³シナンなのだが、それが成功したのである。そこで二〇一九年五月より、国際キログラム原器を廃棄して、基本定数を用いた質量の定義を新しいモノサシとして採用することになったのだ。

私たちの日常生活では、これほどの精度は unnecessary だが、最先端の科学ではより誤差の小さい単位で計った方がより正確な値が得られるから、原器という人工物から、基本定数を使った、より正確なモノサシに変えているわけである。基本定数の値を決定する実験誤差が小さくなったため、人工物である原器の精度を遥かに上回るようになったのだ。時間を決めている時計も、最近では光格子時計と呼ばれる百億年に一秒以下の誤差という精度が得られるようになり、やがて原子時計は **D** になると予想されている。モノサシの精度は、現代の最先端科学のレベルを反映していると言える。

池内了『科学と社会へ望むこと』
(而立書房 二〇二一年六月) より

問1 次の1～3の傍線部のカタカナを漢字に直したとき、それと同じ漢字を含むものを、次の中からそれぞれ選べ。 解答番号は、

16

18

1 シビヨウ

16

- ① 海岸にごみがヒヨウチャクする。
 ② 新商品がコウヒヨウを博す。
 ③ 環境保全のヒヨウゴを掲示する。
 ④ 長期の戦いでヒヨウロウが尽きる。
 ⑤ 前々からの疑問がヒヨウカイする。

2 シゴ

17

- ① 批判を受け入れるカクゴを決めた。
 ② タンゴの節句に子の成長を願う。
 ③ 仕事とゴラクのバランスを取る。
 ④ 病院で多くの患者をカンゴする。
 ⑤ くどくとゴタクを並べる。

3 シナン

18

- ① 子犬のシユウを見分ける。
 ② シチュウに活を求める策を立てる。
 ③ 多くのシレンを乗り越えて成功する。
 ④ 合成ジュシで作られた部品を使う。
 ⑤ このままでは初戦敗退はヒッシだ。

問2 傍線部 a「契機」、b「記述する」、c「微妙な」の本文中での意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選べ。 解答番号は、

19

21

a 契機

19

- ① 行動する際の指針
 ② 都合のよい手段
 ③ 時代に即した考え
 ④ 物事を始めるきっかけ
 ⑤ ある方向に進む傾向

b 記述する

20

- ① 事実そのものを正確に書き示す
 ② 物事の真偽を明らかにする
 ③ 図表・グラフなどで視覚的に示す
 ④ 頭の中でイメージを膨らませる
 ⑤ 数学的に正しく計量する

c 微妙な

21

- ① あまり望ましくない
 ② 言い表せないほど細かい
 ③ 何の役にも立たない
 ④ 普通では想像できない
 ⑤ その場の状況に応じた

問3 空欄 A
 を補うのに最も適切なものを、次の中からそれぞれ選べ。

解答番号は、22
 25。

A

22

- ① 人民の便宜を図った
 ② より客観性を高めた
 ③ 融通が利くようになった
 ④ 基準がさらに多様になった
 ⑤ ついに測定器具が誕生した

B

23

- ① 人間の体
 ② 身近な物
 ③ 自然の事物
 ④ 共通した尺度
 ⑤ 国王の権威

C

24

- ① 恣意的
 ② 一時的
 ③ 自動的
 ④ 主体的
 ⑤ 帰納的

D

25

- ① お手のもの
 ② 絵に描いた餅
 ③ 砂上の楼閣
 ④ 足手まとい
 ⑤ お払い箱

問4 空欄 X・Y
 を補う語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、26。

A

27

- ① X Ⅱ しかも Y Ⅱ ところで
 ② X Ⅱ そこで Y Ⅱ また
 ③ X Ⅱ ただし Y Ⅱ すなわち
 ④ X Ⅱ つまり Y Ⅱ そのうえ
 ⑤ X Ⅱ だから Y Ⅱ もしくは

問5 傍線部^ア「モノサシ」とあるが、筆者は本文の他の箇所では「物差し」という表記も使っている。この表記の使い分けについての説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、27。

- ① 測定の単位の基準を表現する場合は「モノサシ」、長さを測るために実際に使用する道具を表現する場合は「物差し」を使っている。
 ② 現在の測定器具の代用となったものについては「モノサシ」、現在と同じ形状の測定器具については「物差し」を使って表現している。
 ③ 長さ以外のものを測定する単位の基準を表現する場合は「モノサシ」、長さを測定する単位の基準を表現する場合は「物差し」を使っている。
 ④ 世界中どこでも通用する測定の単位については「モノサシ」、東洋世界で考案された測定の単位については「物差し」を使っている。
 ⑤ 測定に使う各種の道具を総合した表現として「モノサシ」、長さを測定することに特化した道具の表現として「物差し」を使っている。

問6 傍線部「国際メートル原器、国際キログラム原器」とあるが、これらについて説明した次のa～eの中から適切なものを全て選んだ場合の組み合わせとして最も適切なものを、後の中から選べ。

解答番号は、

28。

- a 両者は、基本定数を用いたモノサシが誕生したため、ほぼ同時期に廃止されることになった。
- b 両者は、より誤差の少ない新たなモノサシに取って代わられることになった。
- c 一般的な人間の日々の生活にも高精度なモノサシが不可欠となったため、両者は不用となった。
- d 最先端の科学においては、より正確な値が求められるため、両者は使われなくなった。
- e 基本定数の値を決定する実験誤差が小さくなったため、両者の誤差の値は大きくなった。

- ① a・c
② a・b・e
③ b・d
④ b・d・e
⑤ b・c・e

問7 本文を「度量衡の歴史」と「長さ・質量・時間のモノサシとその変更」という話題の転換に合わせて、前半と後半に大きく分ける場合、後半部分は、どこから始まるか。最も適切なものを、次の中から選べ。

解答番号は、

29。

- ① 「物の大きさを測るとは……」から。
- ② 「一七八九年のフランス革命は……」から。
- ③ 「ここまでは度量衡と呼んできたが……」から。
- ④ 「三つの基本単位に対して……」から。
- ⑤ 「自然界には、基本定数と呼ばれる……」から。

問 8 本文の内容に最も合致するものを、次の中から選べ。

解答番号は、

30。

- ① 自然物を基準とした長さの単位は複製がしにくいという欠点があったことから、金属をもとにした物差しを作り全国に配布した。
- ② 時間が新しく度量衡の一つとして認められたのは、きわめて誤差の小さな国際時間原器として原子時計が誕生したからである。
- ③ 基本定数を用いた数式によって長さの基本単位が定められた結果、それを活用することによって原子時計の開発が可能となった。
- ④ 農業の開始とともに、人は自分の身近なものを使って物の大きさや重さを表現するようになり、それによって物々交換が可能になった。
- ⑤ 一八七九年に人工的な原器が制作・配布されるまでは、地球全体に共通する客観的な長さや質量の単位は定まっていなかった。

(国語問題 終わり)